

# 「地域を読み撮る」観光理論へ

竹田 育広

- § 1. 本稿の目的
- § 2. 「地域を読み撮る」ことの意味
  - 2-1 「地域を読み撮る」とは
  - 2-2 「読む」ことの多様性
  - 2-3 「撮る」ことの独自性
  - 2-4 記憶した瞬間が語りかけるメッセージ
- § 3. 「地域を読み撮る」観光理論へ
  - 3-1 観光研究と「地域を読み撮る」視点との関係
  - 3-2 「地域を読み撮る」ことの思考過程
- § 4. 本稿のまとめと観光研究の展望

## 梗概

これまでの観光を取り巻く政治、経済、社会、技術の変化、そして人々の意識がもたらした影響を再考する中で、「観光の本質を問う」動きが見られる。こうした流れの中で、観光や観光研究が今後どこへ向かうのかという問いに対し、本稿は「地域を読み撮る」という新たな手法を用いて、その解決の糸口を探る。「地域を読み撮る」とは、観光者が自分の目線で地域の日常と向き合うことから得られる体験情報を蓄積、編集して、その地域の新たな観光価値を創造する思考過程である。この場合の観光者は地域の表層的な魅力を受動的に消費するのではなく、その背後に根ざしている価値や意味を見出すことが求められ、これからの観光学の学術的潮流の観点からも重要な考え方になってくるだろう。また、この理論は、観光者が地域との深い関わりを通じて新たな価値を創造し、自分自身の体験を地域に還元することで、地域の持続可能な発展に寄与するものでもある。

キーワード：観光研究、地域を読み撮る、思考過程

## § 1. 本稿の目的

本稿は、2023年7月27、28日に開催された「第28回全国高等学校観光教育研究大会」

での基調講演「観光（学）はどこに向かうのか」<sup>1</sup>、ならびに2023年10月28、29日に開催された2023年度余暇ツーリズム学会全国大会での自由論題「地域を読み撮る観光学－観光の総合教養教育へ」<sup>2</sup>をもとに、新たなテーマとして再構成したものである。

「地域を読み撮る」観光理論は、観光学の新たなアプローチとして、地域の魅力を深く探り出し、それを地域観光として活かすための手法である。本稿では、「地域を読み撮る」という視点から観光を捉え、その理論構築について考察する。本来、観光は地域の文化、歴史、風景、そして人々とのつながりを通じて、訪れる人々に深い体験を提供するものである。そのためには、観光者自身がどのように地域を感じ、「読み撮る」のかが重要となる。本稿では、まず「地域を読み撮る」ことの意味を明らかにしたうえで、その思考過程を説明し、新たな観光理論として有用であることを論じていく。

## §2. 「地域を読み撮る」ことの意味

### 2-1. 「地域を読み撮る」とは

本稿が提示する新たな観光の視点が「地域を読み撮る」である。「地域を読み撮る」とは、観光者が地域の表層的な魅力だけではなく、その背後に隠れた価値や意味を推察することである。また、地域の歴史や文化、日常の風景、地域に根ざした生活様式などを観察し、理解する体験でもある。つまり、観光者が単に観光地を訪れるだけではなく、自らの経験や感覚を通じて地域の本質的な魅力を発見することである。

ここからは「地域を読み撮る」ことを構成する具体的な3つの柱について説明する。

第一の柱は、観光者が「日常の何気ない風景からも地域の魅力を発見すること」にある。一般的な観光地では目立つ資源に注目が集まりがちであるが、本来であれば見逃してしまうような風景や、地域の日常にこそ、その地域の本当の魅力が潜んでいることが多い。観光者は、そのような何気ない要素を見つけ出し、地域の深層を理解する力を養うことが重要である。

第二の柱は、「人とのつながりを大切にすること」である。観光者が地域と向き合う際、地域の人々との交流を通じて、その魅力をより深く理解することができる。観光は単なる観光対象の消費ではなく、地域の人々との関わりを通じて、地域の魅力を共有し、体験を通じて絆を深めていくものである。この絆やつながりが、観光者にとっての新たな発見や学びをもたらすとともに、地域の持続可能な観光の発展にも寄与する。

<sup>1</sup> 詳細は、横浜商科大学公式ホームページのトピックス (<https://www.shodai.ac.jp/news-topics/395/>) を参照。

<sup>2</sup> 詳細は、余暇ツーリズム学会公式ホームページ (<http://www.leisure-tour.sakura.ne.jp/convention/>) を参照。

第三の柱は、「自分自身の体験から得た情報を地域に還元する」ことである。観光者が地域で得た経験や発見を地域に還元することで、その魅力はさらに高まり、潜在的な観光者にも新たな価値が生まれる。これら3つの柱は相互に関連し合い、循環する。この循環が持続することで、地域の観光資源の価値が向上していくのである。

また、「地域を読み撮る」の「読む」と「撮る」という二つの行為が重要な役割を果たす。「読む」という行為は、地域の外面的な情報だけではなく、体験を通じてその背後にある意味や価値を理解することを指す。一方で「撮る」という行為は、その瞬間を自分の視点で切り取り、記憶に留めることである。観光者は、この二つの行為を通じて、地域の隠れた魅力を見つけ出し、それを自分自身のものとして感じ取ることができる。

このように、「地域を読み撮る」行為は、単なる情報の受け手としてではなく、観光者自身にしか感じ取れないことを探りながら、その場所の本質を体験することである。地域をただ訪れるだけではなく、自分自身の感覚や視点を大切に、自らが何を感じ、何を見つけるかを探ることから地域の本質を「読み撮る」ことで、観光はより深い体験となるのである。

## 2-2. 「読む」ことの多様性

「読む」という行為は、単に文字情報を発声したり、理解したりするだけではなく、外面的な情報やその背後にある意味や将来などを推察することを含んでいる<sup>3</sup>。「地域を読み撮る」といった場合の「読む」は、文字情報よりも、「体験情報<sup>4</sup>」を「読む」という一面を持つ。体験情報とは「旅やフィールドワークなど実際にその場に行ってはじめて得られる非活字情報」のことであり、例えば、観光者が地域を訪れた際、風景や建物、人々の生活を目にするそこから得られる情報である。すなわち、観光者の体験自体が「読む」行為に該当する。このように、「読む」という行為は、多様な文字情報と体験情報からなる意味を持ち、特に、自分自身の体験を通して得られる体験情報が地域の魅力の発見につながるのである。

## 2-3. 「撮る」ことの独自性

「撮る」という行為は、目の前に広がる光景から瞬間を切り取り、記憶に留める行為である。今も昔も変わらず観光地で写真や動画を撮影することは特別な行為ではない。しかしながら、「地域を読み撮る」という観点から改めて吟味すると、その撮影行為は特別な

---

<sup>3</sup> Goo辞書（デジタル大辞泉）(<https://dictionary.goo.ne.jp/>)

<sup>4</sup> 体験情報という言葉は梅棹忠夫『情報の文明学』中央公論社からの引用

意味を持つ。例えば、観光者がどの瞬間を切り取るかは、その人自身の視点に依存する。誰もが同じ風景を撮影するわけではなく、ひとりひとりの観光者が「自分目線の瞬間」を捉えることで、地域に対する独自の理解が生まれるのである。

本稿において「撮る」行為は、「記録する」というよりも「記憶する」ことに焦点を当てている。なぜならば、その瞬間に観光者が何を感じ、何に心を動かされたのかを写真や動画として残すことで、その時の体験を後になってから振り返ることができるからである。重要なのは、その瞬間が他者にとっては意味を持たないものであっても、観光者自身にとって特別な意味を持つという点である。この「自分目線の瞬間」を切り取ることが、「地域を読み撮る」ための重要なステップとなる。

## 2-4. 記憶した瞬間が語りかけるメッセージ

「撮る」という行為で記憶された瞬間は、その観光者に何かを語りかける。後になってから、観光者がその写真や動画を振り返ったとき、なぜその瞬間にカメラを向けたのか、なぜその光景を切り取ったのかという問いが生まれる。この問いに対して、観光者は自身の内面的な感情や体験にもとづいて答えを見つけることになる。このプロセスは、観光者が地域との関わりを再確認し、自分自身が体験情報に基づいた地域への関心、すなわち地域の魅力の発見のための重要なステップである。例えば、観光地で目にした桜の木が観光者にとってどのような意味を持つのか、その背景にある歴史や地域の人々との関わりを考えることで、観光者自身がその瞬間に込めた感情や考えを明確にする。このように、記憶した瞬間から読んだメッセージは、観光者自身の視点であり、その視点を通じて地域の本質的な魅力に触れることができる。

## § 3. 「地域を読み撮る」観光理論へ

ここからは、これまでに述べてきた観光（学）が抱える課題に対する解決の糸口として「地域を読み撮る」という独自の視点から新たな観光資源を創り出す理論を提示する。さらに、「地域を読み撮る」理論が、これまでの観光の研究や学びの現場で行われてきた発想や手法とは異なる点について明らかにする。

### 3-1. 観光研究と「地域を読み撮る」視点との関係

まず、これまでの観光学の研究は、観光地に多くの観光者を誘致し、その地域の観光資源をどのように維持し、質を保つかに焦点を当ててきた。かつ、観光者が感動や楽しさを感じるような観光地を作るために、地域の魅力を引き出し、それを守るための観光政策や

計画が数多く提案されてきた。しかし、このアプローチは、観光地の魅力を外から「見せる」ものとして提示し、観光者がそれを「消費」するかたちに近い。言い換えれば、これまでの観光学は観光者の受動的な旅行体験を提供することに寄与してきたともいえるのである。

一方、本稿が掲げる「地域を読み撮る」という考え方は、観光者自身が地域を主体的に体験し、その場所の本質的な魅力を自ら見つけることに力点を置いている。また、観光者がただ与えられたものを受動的で消費するのではなく、自分自身の視点や感覚で地域の価値を「読む」ことを通じて、より深い観光体験を実現する。この視点を踏まえると、従来の観光政策や計画が「量」と「質」にもとづいて行われてきたのに対して、これからの観光学では観光者自らの主体的な「体験」やその体験に深く根差す「根幹・意味」が重要なキーワードとなってくると思われる。

このほか、地域の回遊性向上の視点とも「地域を読み撮る」ことは関連している。回遊性とは観光者が地域内をどのように移動し、複数の観光スポットをどのように回るかを指すが、従来の研究はこの回遊ルートの効率性に重きを置いてきた。しかし、近年は回遊ルートの「評価」に関する研究が増えている。これも、観光者が地域内でどのような施設に興味を持ち、その場所をどう「読み撮る」のかという主体的な体験を考慮したアプローチへと変化していることを意味している。

そのほか、マイクロツーリズムという旅行形態がコロナ禍で再注目された点にも注目する必要があるだろう。つまり、マイクロツーリズムでは、観光基本距離が短く、観光地での滞在時間や消費が従来と異なるかたちで展開されるため、観光の価値創出に対する新しい視点が求められている。この点も「地域を読み撮る」とことと密接な関係にある。なぜならば、観光者が短い距離であっても、その地域の特有の魅力を読み取り、新しい観光価値を発見する能力が重要となるからである。ひとりひとりの観光者が地域の中で何を発見し、どのような瞬間を「読み撮る」かが、これからの地域活性化においては鍵となる。

「地域を読み撮る」ことを主眼に置いた観光活動は、観光者がただ決められたルートを回るのではなく、地域内で自分の興味や関心に応じて自由に移動し、その中で地域の新たな魅力や価値を発見するプロセスを重要視する。このような観光者の主体的な体験が、観光地の活性化や観光ビジネスに新しい可能性をもたらすのである。

つまり、今後の観光学では観光者の主体的な体験と地域を「読み撮る」ことが密接に結びつき、経済合理性にとどまらない、観光者が自分の目線で地域の日常と向き合い、地域の本質的な魅力を自分自身で見つけ出すという観光の根本的な意味を捉えた新しい観光価値を創出することが重要となってくるといえるだろう。

### 3-2. 「地域を読み撮る」ことの思考過程

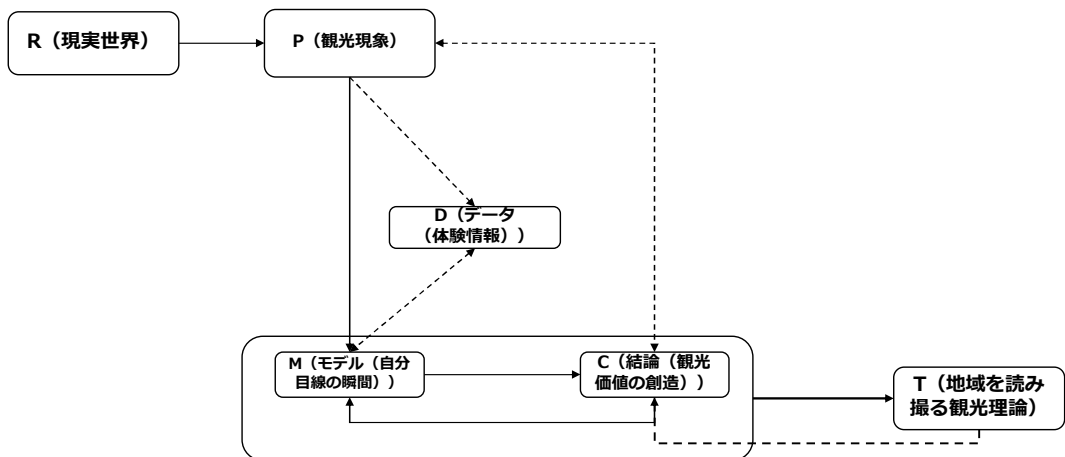
「地域を読み撮る」ことは、ある目的をもって実際に観光地を調査し、思考する過程である。その思考過程を説明するために、現実世界（Reality、以下Rと略記）、観光現象（Phenomenon、以下Pと略記）、データ（体験情報）（Data、以下Dと略記）、モデル（自分目線の瞬間）（Model、以下Mと略記）、結論（観光価値の創造）（Conclusion、以下Cと略記）という5つの段階を示す思考過程図（図1）を用意する。この図は一般的な思考過程、もしくは研究過程（三神俊信1982）を「地域を読み撮る」プロセスに当てはめて表現したものである。この思考過程から観光者が地域の本質的な魅力を発見し、それを観光資源として活用していく流れが明らかになる。

#### (1) R→Pの段階：現実世界から観光現象を見つける

Rは「現実世界」を指し、Pは「（現実世界の中に存在するさまざまな）観光現象」を表している。観光において、この段階は地域の日常や現実世界に存在する観光現象を発見することにあたる。具体的には、観光者が地域を訪れ、何気ない風景や日常の中に潜む地域独自の魅力を見出す段階であると考えられる。

例えば、ある観光者が都市の喧騒を離れ、地方の小さな村を訪れたとしよう。そこでは、地元の住民が日常的に営む生活、古い建物、地域に根ざした伝統行事など、観光ガイドに載っていないものが多く存在する。これらは、観光者が日常的な視点で捉えない『観光現象』であり、観光者が自らの体験を通じて初めてその価値に気づくものである。このR→Pの段階では、観光者は地域の「現実」を観察し、その中から多様な観光現象を見つけ出し、観光としての可能性を探る。

図1 地域を読み撮る思考過程図



出所）三神俊信（1982）をもとに筆者が一部加筆した

## (2) P→Mの段階：観光現象からモデル（自分目線の瞬間）を形成する

次に、PからMへの段階に進む。この段階では、観光者が観光現象（P）をもとに自分なりのモデル（M：自分目線の瞬間）を形成することが求められる。ここでいうモデルとは、観光者が自分目線で捉えた瞬間を具体的な形で記憶し、体験情報（D1、D2、D3）として『非言語的に』表現するプロセスである。この非言語情報の典型的な例が「写真または映像」である。観光者が村の古い神社の前を通ったとき、何気ないが美しい光景に心を動かされ、その瞬間をカメラに収める。この写真（映像）は、観光者がその地域の魅力を捉えた「モデル」であり、それは単なる記録ではなく、その瞬間に感じた感情や気づきを含んでいる。この段階では、観光者が地域の観光現象を記憶し、それを自分なりのモデルとして表現することにより、地域の魅力が観光者の体験を通じて可視化されるのである。そして、D1、D2、D3を関連づけて、それらの関係を記述することは、地域の観光資源の発掘や地域内の回遊性向上への理解を促す。

## (3) M→Cの段階：自分目線の瞬間（モデル）から地域の観光価値（結論）を生み出す

最後に、M→Cの段階は、構築した自分目線の瞬間（モデル）から地域の観光価値（結論）を導く段階であると言える。ここで、観光者が撮影した写真（映像）やその他の体験情報をもとに、地域の新たな魅力について仮説を立て、その仮説を検証する。この段階は、観光者自らが自分目線で捉えた地域の魅力を観光資源として活用し、それを観光ルートやコースに発展させるプロセスに当たる。

例えば、観光者が神社の写真（映像）を見返し、その背後にある地域の歴史や文化に興味を持ったとする。その魅力を深く探るために、地域の他の歴史的な場所や風景を結びつけることで、観光者自身が『新たな観光コース』を設計する。この新しい観光コースは、単にガイドブックに載っている情報ではなく、観光者の「読み撮る」行為を通じて生み出されたものである。こうして、観光者の体験をもとにした新たなストーリーが展開され、それが地域の回遊性や観光価値を高める。

以上のように、『地域を読み撮る』理論は、観光者が現実世界（R）で見つけた観光現象（P）をもとに自分目線の瞬間（M）を構築し、そのプロセスから地域の観光価値（C）を導き出す。この思考過程を経ることで、観光者は地域の日常に潜む隠れた魅力を発見し、それを新たな観光資源として活用できる。このプロセスは、観光が単なる消費行為ではなく、観光者と地域との対話を通じて新たな価値を創造する活動であることを示している。また、この理論は、地域観光の持続的な発展にも寄与するものであり、観光者自身が地域に深く関わり、地域の本質を読み撮ることで、観光地としての新たな可能性が開ける。

## § 4. 本稿のまとめと観光研究の展望

本稿では「地域を読み撮る」観光理論が思考過程の一つであり、かつ新たな観光の思考パターンであることをテーマにし、明らかにしてきた。ここではそのエッセンスを4つのポイントにまとめる。

1つ目は「体験情報の中にある未知の自分の瞬間」への関心を持つことが出発点である。これは、観光者自身が地域の中で出会う新しい体験や、日常的に見逃されがちな瞬間を意識的に捉え、その瞬間を大切に記録することを意味する。この「未知の自分の瞬間」とは、個人的な視点からの特別な気づきや発見であり、それが観光者にとっての独自の感動となる。

2つ目がそうした瞬間から生まれる独創的な表現やストーリーが重要である。観光者は、自分自身の言葉や視点でその体験を表現し、ストーリーとして他者に伝えることで、新しい観光の価値を生み出す。これは、既存の観光資源を再評価し、新しい視点で魅力を再発見するプロセスでもある。

3つ目が「体験情報から新たな発見、再発見を生み出す」ことが可能になる。自分目線で捉えた地域の魅力を観光資源として新たに位置付けることで、地域活性化につながる。例えば、ある地域の日常の風景が、その地域を訪れる観光者の目には特別で魅力的に映り、それが観光資源としての価値を持つことになる。

最後に、これらのプロセスは「身近な観光を作り出す新たな思考パターン」としての観光理論を形成する。地域の特性や魅力を観光者自身の目で読み撮り、独自のストーリーを構築することが観光の新たな価値創造につながり、地域観光の発展に寄与する。

このように「地域を読み撮る」という行為は、観光の現象を深く理解し、新しい観光資源を創出するための重要な思考パターンであり、観光理論の一部として位置づけられる。

最後に、今後の課題としてこれからの観光研究の展望について、筆者なりの見解を示し、本稿を閉じたい。

観光学（観光研究）は、近年、社会的変化や環境問題、経済的なグローバル化に伴い、その研究範囲を大きく広げてきた。観光は旅行消費に限定した経済活動に留まらず、地域の社会や文化、環境に深く関わる現象である。このような状況において、観光学は農学、建築学、心理、生態、歴史、経済、経営、地理、文化と幅広い領域にわたって学際的アプローチを必要とする学問として発展してきた。それを裏付けるものとして、日本学術振興会が作成する研究審査区分（科学研究費助成事業審査区分表（令和5（2023）年度 改正）を参照）では、観光学は「地理学、文化人類学、民俗学およびその関連分野」、「経済学、経営学およびその関連分野」、そして「社会学およびその関連分野」と3か所に置かれている。

このような学問的位置づけのなかで、主に2010年代後半以降、観光（あるいは観光学）のあり方考察した文献が次々と出版されている（井口2017、橋本2018、福井2022、島村2023、安村2023）。これらの著作に共通する点は、現在の観光（あるいは観光学）が抱えている矛盾であり、観光学が直面している現代的な課題（例えば、オーバーツーリズム（阿部2020、2021）、持続可能な観光（島川2020）、COVID-19後の観光再編（須藤2021）など）であり、それに対するさまざまな視点からのアプローチである。こうした傾向は観光学が単なる経済活動の枠を超えて、社会的、文化的、環境的な視点も含む複雑な学問領域へと進化していることを裏付けるものである。このような状況下で、今後の観光研究には、地域社会との共生、持続可能性、多様性の尊重、そしてリスクに対応した柔軟な観光の再構築が求められている。観光学はこれらの課題に対して、引き続き学際的な視点から多角的にアプローチすることが必要であると同時に、新しい視点の導入も必要であろう。

## 参考文献

- [1] 阿部 大輔「ツーリズムの終焉？－ポスト・コロナの観光の「かたち」」(矢作弘，阿部大輔，服部圭郎，ジアンカルロ・コッテラ，マグダ・ポルゾーニ著『コロナで都市は変わるか 欧米からの報告』学芸出版社，2020年，第7章)。
- [2] 阿部 大輔「オーバーツーリズムから包括的な観光へ」(阿部大輔編『ポスト・オーバーツーリズム－境界を再生する観光戦略－』学芸出版社，第11章，2021年)。
- [3] 井口 貢『反・観光学－柳田國男から、「しごころ」を養う文化観光政策へ』ナカニシヤ出版，2017年。
- [4] 島川 崇『新しい時代の観光学概論－持続可能な観光振興を目指して－』ミネルヴァ書房，2020年。
- [5] 島村 菜津『世界中から人が押し寄せる小さな村－新時代の観光の哲学－』光文社，2023年。
- [6] 須藤 廣「リスク社会と観光－COVID-19危機のなかの観光について考える」(遠藤秀樹編『アフターコロナの観光学－COVID-19以後の「新しい観光様式」』新曜社，2021年，第7章)。
- [7] 橋本 和也『地域文化観光論 新たな観光学への展望』ナカニシヤ出版，2018年。
- [8] 福井 一喜『「無理しない」観光－価値と多様性の再発見－』ミネルヴァ書房，2022年。
- [9] 三神 俊信「モデル・構造・理論と方法論－レヴィ＝ストロースの社会構造体に関連して－」(『政経論叢』明治大学政治経済研究所，50 (5-6) ,1982年3月30日 ,pp83-127。
- [10] 安村 克己『観光学の今を問う－前田勇インタビューからひもとく観光学の原点－』学文社，2023年。